

『狐』

大弓を提さげた肥満の父を真先まっさきに、田崎たざきと喜助きすけが二人して、倒さかに獲物を吊えもした天秤棒をかつぎ、その後あとに清五郎せいごろうと安やすが引続き、積たった雪を踏たみしだき、隊伍たいぎ正しく崖の上に立現たわれた時には、私はふいと絵本で見る「忠臣蔵」の行列を思出し、ああ勇いさましいと感じた。しかし間近ちゆうしんぐらく進んで書生の田崎が例の漢語交りで、「坊ちゃんこの通りです。天網恢々疎てんもうかいかいそにして漏さらず。」と差付さしつける狐を見ると、鳶口で打割とうがいられた頭蓋と喰いしばった牙の間からどろどろした生血なまちが雪に滴る有様、私は覚えず母親の柔い袖のかげに顔を蔽おおいかくした。

さて午過ぎからは家中大酒盛をやる事になったがこの大雪で魚屋は河岸かしの買出しが出来なかったという処から、父は家の鶏にわとりを殺して出入の者共に饗応きやうおうする事にした。一同大喜び、狐の忍入しのびいった鶏小屋から二羽の鶏とりを捕つかえて潰つぶした。黒いのと白い斑ぶちある牝鶏めんどり二羽、それは去年の秋の頃、綿こがねいろの黄色なす羽に包まれピヨピヨ鳴いていたのをば私が毎日学校の行帰り、餌えを投げ菜をやりして可愛がったが、今では立派に肥った母鶏になったのを、あわれ二羽が二羽とも、同じごっせい一声の悲鳴と共に田崎の手に首をねじられ、喜助の手に羽をむしまれ、安の手に腹を割さかれ腸わたを引出されてしまった。夜よ深ふけまで舌なめずりしながら酒を飲んでいる人たちの真赤まっかな顔が私には絵草紙で見る鬼の通りに見えた。

眠りながらその夜よ私は思った。あの人たちはどうしてあんなに狐を憎くんだのであろう。鶏を殺したからとて、狐を殺した人々は、それがために更にまた鶏を二羽まで殺した。

ああ、ツルゲネエフは蛇へびと蛙かえるの争いから幼心に神の慈悲心を疑った。私はすこしく書物を読むようになるが早いか、世に裁判といい懲罰というものの意味を疑うようになったのも、あるいは遠い昔の狐退治。それらの記憶が知らず知らずその原因になったのかも知れない。